

## (32) 「理想的人間」

### （「或る反時代的人間の偵察行」の32）

人間が「願望する」者である限り、哲学者の「趣味」には合わない。哲学者は「願望する人間」、また「『望ましい』人間」を軽蔑する。「ニヒリスト」である哲学者は、人間の「理想の背後に無を見出す」。あるいは「無」を見出さないまでも、「無価値なもの」、「不条理なもの」、「病的なもの」、「臆病なもの」、「疲れたもの」、彼の生の「飲み乾された盃」のあらゆる種類の「沈殿物」のみを見出す。人間の「願望の歴史」はその「恥部」である。

## (33) 利己主義の価値

### （「或る反時代的人間の偵察行」の33）

「自己欲(die Selbstsucht)」は、①価値がある場合も、②無価値で軽蔑すべきである場合もある。すなわち、個々人は、①「生の上昇線」を描くか、②「生の下降線」を描くかによって判断される。①の場合は、その価値は計り知れない。②の場合、すなわち、個々人が下降や「衰退」や「慢性的退化」や「疾病」を表している場合は、価値を認めることはできず、「出来の良い人たち」の「寄生者」に過ぎない。ただ、これまで民衆や哲学者が理解してきた「個人」は実のところ「誤謬」である。「個人」はそれだけでは何ものでもなく、「原子(Atom)」でもなく、「鎖の輪(Ring der Kette)」でもなく、「以前のものの単なる相続者」でもない。「個人」とは「彼自身に到るまでの人間という一本線の全体(die ganze Eine Linie Mensch bis zu ihm hin selber)」である。

## (34) デカダンとしてのキリスト教徒と無政府主義者

### （「或る反時代的人間の偵察行」の34）

無政府主義者が「権利」、「公平」、「平等権」を要求する時、彼は「その蒙昧の圧力」のもと、「何ゆえ本来彼は苦しんでいるのか」、「何に彼は乏しいのか」ということを把握できない。「原因を求める衝動」が彼のうちでは強力に働き、誰かが彼の困窮の責めを負わなければならない。その「憤激」自身がすでに彼には気持ちよく、悪態をつくことが楽しみなのである。そこには「ささやかな力の陶醉」がある。すでに「嘆き、呪詛」が「生」にとって刺激となる。そこには「微量の復讐」がある。そこでは「私が賤民(canaille)であるなら、おまえもまたそうであるべきである」と言われる。そして、この論理へとむけて「革命」が行われる。そもそも「呪詛」は何の役にも立たず、それは「弱さ」から由来する。自分の困窮を他人のせいにするか、自分自身にするか、前者は社会主義者のやり方、後者はキリスト教徒のやり方であり、本来的区別はない。共通するもの、そのうえ品位のないことは、自分が苦しむことの責めを誰かが負うべきであるとするところにある。要するに、苦悩する者は自分の「ささやかな復讐」を冷やす原因を到るところに見出すのである。このようなキリスト教徒も無政府主義者も、両者ともデカダンである。

### (35) デカダンス道德の臭気

#### (「或る反時代的人間の偵察行」の35)

「利他主義的道德」、すなわち「自己欲」を萎縮させる道德は、個人にとっても民族にとっても「悪い徴候」である。「自己欲」が欠け始めると「最も善きもの」が欠ける。それは「自己を害するものを選ぶこと」であり、デカダンスの方式である。人間も「利他的」になったら終わりである。「価値あるものは何もない。——生きることは何の価値もない」というような判断は危険であり、伝染病のように広まる。キリスト教あるいはショーペンハウアーの哲学は熱帯植物のように繁茂し、その臭気は数千年にわたって「生」に害毒を与えている。